

シェイクスピアの作品群における 迂言的 do の歴史的研究

～創作年代別による do の分布状況の変化について～

古 庄 信

はじめに

本稿では、サブタイトルに示したように、Shakespeare の作品群における迂言的（助動詞）do の分布が各作品をとおして、どのように変化しているかを調査し、Ellegård のグラフの示す、十六世紀から十八世紀にかけての do の急激な成長（あるいは衰退）の様子⁽¹⁾が、作品中にどの程度反映されているかという点について、検証することを目的とした。

これまでの調査では、各ジャンル別による do の分布状況を観察し、そこに何らかの傾向が見出せないか、あるいは do が否定文・疑問文などの各種の文で、なぜ発達の手が速いのか、などの問題に焦点を絞ってきたが、ここで新たに考えられるのは、前述のように、do の使用について変化の最も大きな時期にあった Shakespeare の作品群が、果たしてどの程度、その変化の影響を受けていたのか、という問題である。

仮に Shakespeare の初期の作品群と末期の作品群における do の分布状況を比較した場合、彼の創作年数は二百年以上に及ぶ do の発達期間の中で、せいぜい四半世紀に満たないのだが、その短い年月の中でも、もし初期の作品群よりも末期の作品群において do が多く見られるとするならば、明らかにシェイクスピアも do の使用について、時代の影響を受けていったのではないかと推測される。逆に、初期と末期においてさほど do の分布状況に大差がなければ、変化の速度はある程度緩やかなものであったということができよう。

これまでの観察結果によると、Ellegård も指摘しているように、否定疑問文・肯定疑問文・否定平叙文・否定命令文の順に do はその成長の速度が異なっている。⁽²⁾したがって、Shakespeare のようなある特定の作家の作品において、一概に変化の影響の有無を決定づけることは困難であるかもしれない。

そこで筆者は、これまで収集したデータと合わせて、今回新たに初期の作品群と末期の作品からデータを追加収集し、これらを創作年代別に整理し、さらにグループ I からグループ IV まで、四期に分類してみた。創作年代については、B. Evance の Chronology of the Shakespeare's Dramas⁽³⁾ に従った。

この結果、do の使用について、やはり初期の作品と後期の作品とでは do の分布に差があることが認められた。また、do 使用の影響を強く受けているように思われる文と、さほど分布に変化の見られない文が観察された。詳細については、本論とまとめの中で述べることとする。

テキストは、Riverside⁽⁴⁾ 版を用い、またコンコードランスは Spevac の The Harvard Concordance⁽⁵⁾ を使用した。

今回新たに調査した作品：

The 1st Part of Henry the Sixth (以下 1H6), *The 2nd Part of Henry the Sixth* (以下 2H6), *The 3rd Part of Henry the Sixth* (以下 3H6), *The Comedy of Errors* (以下 ERR), *The Taming of the Shrew* (以下 SHR), *The Two Noble Kinsmen* (以下 TNK).

これまでに調査した作品：

Much Ado About Nothing (以下 ADO), *All's Well That Ends Well* (以下 AWW), *As You Like It* (以下 AYL), *The Merry Wives of Windsor* (以下 WIV), *Twelfth Night* (以下 TN), *Hamlet* (以下 HAM), *Othello* (以下 OTH), *King Lear* (以下 LR), *Macbeth* (以下 MAC), *Timon of Athens* (以下 TIM), *Troilus and Cressida* (以下 TRO), *Romeo and Juliet* (以下 ROM), *The 1st Part of King Henry IV* (以下 1H4), *The 2nd Part of King Henry IV* (以下 2H4), *The Life of King Henry V* (以下 H5), *Pericles* (以下 PER), *The Winter's*

Tale (以下 WT), *The Tempest* (以下 TMP).

調査対象となった作品の年代別分類：

グループ I : 1H6, 2H6, 3H6, ERR, SHR……………(1589~1594)

グループ II : ROM, 1H4, 2H4, WIV, ADO, H5, AYL …(1595~1599)

グループ III : HAM, TN, TRO, AWW, OTH, LR, MAC…(1600~1606)

グループ IV : TIM, PER, WT, TMP, TNK……………(1607~1613)

分類の方法については、これまでと同様、Ellegard にしたがって I. 否定疑問文 (以下 NQ) II. 肯定疑問文 (AfQ), III. 否定平叙文 (ND), IV. 否定命令文 (NI), V. 肯定平叙文 (AD) の 5 グループに、さらに II の肯定疑問文については、1. Yes/No を答に要求する Verb Question (以下 VQ), 2. When, why how, などの副詞的疑問詞をもつ Adverb Question (以下 AQ), 3. 疑問詞 What をもつ Object Question (以下 OQ) の 3 タイプに分類して、各文における do の分布を観察した。以下はその各グループにおける観察結果である。

I. NQ における do

表 I-1

Group I	1H6	2H6	3H6	ERR	SHR
P. do NQ	0	1	0	1	2
P. S NQ	0	1	0	0	2
V. do NQ	0	3(+1)	4	5	1
V. S NQ	4	4	5(+1)	2(+2)	4

p. do : 57.1%

v. do : 38.9%

表 I-1 の数値からわかるように、初期の作品の散文 (P. do/S NQ) においては否定疑問文の発生数自体が少なく do の使用状況については何とも言い難いが、5 作品の合計からみる do の割合は 57% という数値である。また韻文 (V. do/S NQ) の例も同様に少ないが、ERR 以外の 4 作品では do タイプよりも S タイプの方が優勢であることがわかる。5 作品全体における

do の割合は41%となっている。2H6, 3H6, ERR の韻文例数の () 内の数値は Wh の疑問詞をもつ否定疑問文や付加疑問文の例数を示す。例は次のとおり。

▲Edmond Mortimer, Earl of March, /Married the Duke of Clarence' daughter, did he not? (2H6.4.2.136) ▲Why come you not? (3H6.1.4.39) ▲Why bear you these rebukes, and answer not? (ERR.5.1.89)

表 I-2

Group II	ROM	1H4	2H4	WIV	ADO	H5	AYL
P. do NQ	2	4	5	8	7	1	3
P. S NQ	0	1	4	7	4	0	2
V. do NQ	5	5	0	0	6	0	2
V. S NQ	5	1	0	0	1	2	2

p. do : 62.5%

v. do : 62.1%

グループIIではIに比べ、散文例はやや多く見られ、7作品のトータルでのdoの割合は62.5%と増加している。また韻文でも62.1%という数値でやはり増加の傾向を示している。

表 I-3

Group III	HAM	TN	TRO	AWW	OTH	LR	MAC
P. do NQ	0	9	4	1	2	0	0
P. S NQ	1	0	0	2	0	1	0
V. do NQ	2	0	2	1	2	4	1
V. S NQ	2	1	0	3	1	5	6

p. do : 80.0%

v. do : 40.0%

グループIIIの作品群については、HAM他二作において散文ではdoの例が見られないが、グループ全体のトータルで見ると、doの割合は80%と、グループIIよりさらに伸びている。

表I-4

Group IV	TIM	PER	WT	TMP	TNK
P. do NQ	0	1	0	2	0
P. S NQ	1	1	4	0	0
V. do NQ	0	2	3	2	2
V. S NQ	0	1	3	0	1

p. do : 33.3% v. do : 64.3%

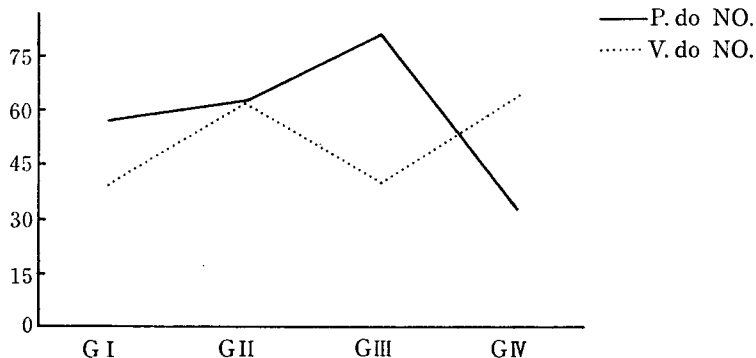
グループIVでは、しかしながら、散文での割合33%とグループIIIに比べ、大きく減退している。否定疑問文の例自体が少ないため、このような数値が出たが、作品数その他の違いによるデータの誤差がそれほどあるとは考えられない。これについては、前回の調査ですでに述べた⁽⁶⁾。

ここまでのグループIからIVまでの do の分布における推移を図表化して見るならば下の表I-5とグラフのようになる。これによると散文ではグループIからIIIにかけての発達が一層明確である。

表I-5

(↑は増加, ↓は減退を示す。)

G I	P. d NQ : 57.1%		V. d NQ : 38.9%	
G II	P. d NQ : 62.5%	↑	V. d NQ : 62.1%	↑
G III	P. d NQ : 80.0%	↑	V. d NQ : 40.0%	↓
G IV	P. d NQ : 33.3%	↓	V. d NQ : 64.3%	↑



(グラフの数値は%を示す。)

II. AfQ における do

各作品の肯定疑問文における do の分布は次の表II-1～4に見られるとおりである。

表II-1

Group I	1H6	2H6	3H6	ERR	SHR
P. do AfQ	0	4	1	2	7
P. S AfQ	1	2	2	4	11
V. do AfQ	9	17	16	17	18
V. S AfQ	34	29	45	29	35

p. do : 41.2%

v. do : 30.9%

表II-2

Group II	ROM	1H4	2H4	WIV	ADO	H5	AYL
P. do AfQ	6	18	21	21	20	3	21
P. S AfQ	1	33	20	30	13	23	31
V. do AfQ	14	8	10	0	5	5	7
V. S AfQ	37	10	11	0	9	21	9

p. do : 42.1%

v. do : 33.6%

表II-3

Group III	HAM	TN	TRO	AWW	OTH	LR	MAC
P. do AfQ	28	23	15	20	8	12	2
P. S AfQ	21	20	17	14	11	18	1
V. do AfQ	18	4	9	12	38	9	21
V. S AfQ	25	10	12	10	30	31	21

p. do : 51.4%

v. do : 44.4%

表Ⅱ-4

Group IV	T I M	P E R	W T	T M P	T N K
P. do AfQ	14	11	3	4	0
P. S AfQ	1	5	9	7	3
V. do AfQ	12	7	4	17	21
V. S AfQ	17	10	11	11	25

p. do : 47.8%

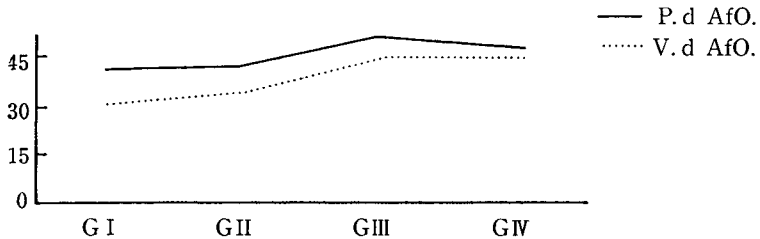
v. do : 45.2%

これらの結果をまとめるならば、表Ⅱ-5 とグラフに表される。

表Ⅱ-5

(↑は増加, ↓は減退を示す。)

G I	P. d AfQ : 42.2%		V. d AfQ : 30.9%
G II	P. d AfQ : 42.1%	↑	V. d AfQ : 33.6%
G III	P. d AfQ : 51.4%	↑	V. d AfQ : 44.4%
G IV	P. d AfQ : 47.8%	↓	V. d AfQ : 45.2%



表Ⅱ-5 とグラフにおいて見られたように AfQ 全体ではグループ I からIV にかけて、散文、韻文ともに、do は緩やかに増加しているといえる。

II. 1. VQ における do

各グループ：VQ における do の分布は次の表Ⅱ-1-2~4 に見られる通りである。

表II-1-1

Group I	1H6	2H6	3H6	ERR	SHR
P. do VQ	0	3	0	1	5
P. S VQ	1	0	1	3	6
V. do VQ	4	10	12	10	11
V. S VQ	13	4	9	9	16

p. do : 45.0%

v. do : 47.9%

表II-1-2

Group II	ROM	1H4	2H4	WIV	ADO	H5	AYL
P. do VQ	5	10	16	19	15	2	17
P. S VQ	0	13	9	10	8	10	11
V. do VQ	11	5	4	0	4	3	3
V. S VQ	12	0	4	0	6	17	3

p. do : 57.9%

v. do : 41.7%

表II-1-3

Group III	HAM	TN	TRO	AWW	OTH	LR	MAC
P. do VQ	16	17	11	13	4	8	1
P. S VQ	6	5	4	4	1	12	0
V. do VQ	12	0	6	9	31	7	12
V. S VQ	12	6	6	7	10	15	9

p. do : 68.6%

v. do : 54.2%

II-1-4

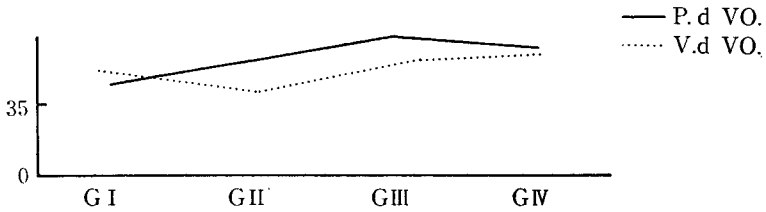
Group IV	TIM	PER	WT	TMP	TNK
P. do VQ	7	9	3	3	0
P. S VQ	3	2	5	2	1
V. do VQ	8	2	4	10	13
V. S VQ	10	2	6	2	5

p. do : 62.9%

v. do : 59.7%

表Ⅱ-1-5

G I	P. do VQ : 45.0%		V. S VQ : 47.9%	
G II	P. do VQ : 57.9%	↑	V. S VQ : 41.7%	↓
G III	P. do VQ : 68.6%	↑	V. S VQ : 54.2%	↑
G IV	P. do VQ : 62.9%	↓	V. S VQ : 59.7%	↑



表Ⅱ-1-5で表されたように、VQ の場合は AfQ 全体の場合よりもさらに顕著にグループ I から III までの do の増加が見られる。

Ⅱ. 2. AQ における do

表Ⅱ-2-1

Group I	1H6	2H6	3H6	ERR	SHR
P. do AQ	0	1	1	1	1
P. S AQ	0	0	1	0	4
V. do AQ	5	5	3	1	6
V. S AQ	11	11	21(+1)	11(+2)	13

p. do : 66.7% (25~50)

v. do : 25.9%

表Ⅱ-2-1で明らかなように、AQ の用例数が散文では特に少なく合計では67%という数値だが、各作品別にみるなら約25%~50%の割合である。

表Ⅱ-2-2

Group II	ROM	1H4	2H4	WIV	ADO	H5	AYL
P. do AQ	0	1	1	1	5	0	3
P. S AQ	1	4	7	15	4	4	12
V. do AQ	2	2	4	0	0	2	4
V. S AQ	12	2	4	0	3	1	2

p. do : 18.9%

v. do : 36.8%

表Ⅱ-2-3

Group III	HAM	TN	TRO	AWW	OTH	LR	MAC
P. do AQ	7	2	2	5	2	2	0
P. S AQ	9	11	5	2	3	5	1
V. do AQ	5	3	1	2	7	1	8
V. S AQ	6	2	5	0	19	13	10

p. do : 35.7%

v. do : 32.9%

表Ⅱ-2-4

Group IV	TIM	PER	WT	TMP	TNK
P. do AQ	4	2	0	1	0
P. S AQ	5	1	1	2	1
V. do AQ	4	4	0	5	8
V. S AQ	5	5	2	7	10

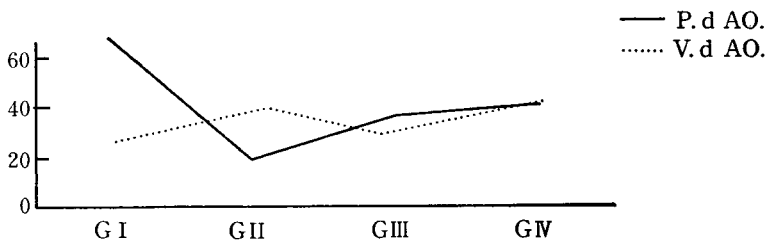
p. do : 41.2%

v. do : 42.0%

表Ⅱ-2-5

(↑は増加, ↓は減退を示す。)

G I	P. do AQ : 66.7%		V. do AQ : 25.9%
G II	P. do AQ : 18.9%	↓	V. do AQ : 36.8%
G III	P. do AQ : 35.7%	↑	V. do AQ : 32.9%
G IV	P. do AQ : 41.2%	↑	V. do AQ : 42.0%



このように、AQ の場合は VQ の場合と異なり、表Ⅱ-2-5 の数値で見ると、グループ I から IV まで減少から増加へとやや変動的な成長の様子を示しており、全体で do が成長しているか否かを結論づけることは困難であるように思われる。

II. 3. OQ における do

OQ における do の分布の変化は次の表Ⅱ-3-1 ~ 4 に見られるとおりである。

表Ⅱ-3-1

Group I	1H6	2H6	3H6	ERR	SHR
P. do OQ	0	0	0	0	1
P. S OQ	0	2	0	0	1
V. do OQ	0	2	1	6	1
V. S OQ	10	14	14	7	6

p. do : 20.0%

v. do : 14.7%

表Ⅱ-3-2

Group II	ROM	1H4	2H4	WIV	ADO	H5	AYL
P. do OQ	1	6	2	1	0	1	1
P. S OQ	0	17	5	5	1	9	8
V. do OQ	1	1	2	2	0	0	0
V. S OQ	13	7	2	2	0	3	4

p. do : 21.1%

v. do : 14.7%

表Ⅱ-3-3

Group III	HAM	TN	TRO	AWW	OTH	LR	MAC
P. do OQ	5	1	2	2	2	2	1
P. S OQ	6	4	8	8	7	1	0
V. do OQ	1	1	2	1	0	1	1
V. S OQ	7	2	1	3	1	5	2

p. do : 30.6%

v. do : 25.0%

表Ⅱ-3-4

Group IV	TIM	PER	WT	TMP	TNK
P. do OQ	3	0	0	0	0
P. S OQ	3	2	2	3	1
V. do OQ	0	1	0	2	0
V. S OQ	2	3	3	2	12

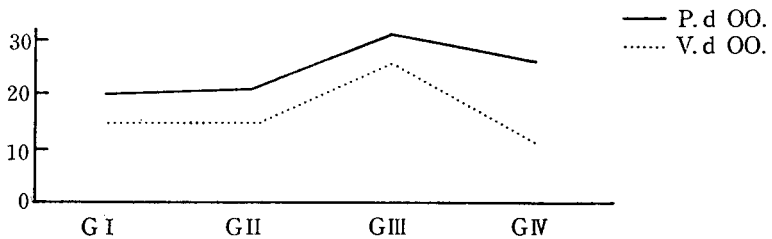
p. do : 25.0%

v. po : 12.0%

表Ⅱ-3-5

(↑は増加, ↓は減退を示す。)

G I	P. do OQ : 20.0%		V. do OQ : 14.7%
G II	P. do OQ : 21.1%	↑	V. do OQ : 14.7%
G III	P. do OQ : 30.6%	↑	V. do OQ : 25.0% ↑
G IV	P. do OQ : 25.0%	↓	V. do OQ : 12.0% ↓



表Ⅱ-3-5において明らかなように、OQの場合もAQの場合同様、用

例数の少なさに問題があるが、散文と韻文の各グループにおける数値は増減をくり返しており、全体で do が増加したと明確には言い難い。

III. ND における do

Ellegård によると、⁽⁷⁾ ND (否定平叙文) における do は1500年代半ばまでは、NQ (否定疑問文) や AfQ (肯定疑問文) における do と同様、急速に発達していたが、それから1600年代半ばまでの約1世紀間は25~40%という低い普及率に留まっている。そして、1700年台にかけて NQ や AfQ に追いつくべく再び急成長している。このように ND において do の成長が1世紀もの間止まっていた、あるいは25~40%台に押さえられていたのは、何が原因であろうか。Shakespeare では、グループ I からIVまで次の表III-1~4に見られるような数値が得られた。

表III-1

Group I	1H6	2H6	3H6	ERR	SHR
P. do ND	0	1	0	2	2
P. S ND	0	1	0	4	13
V. do ND	4	3	0	5	3
V. S ND	24	26	31	25	33

p. do : 21.7%

v. do : 9.8%

表III-2

Group II	ROM	1H4	2H4	WIV	ADO	H5	AYL
P. do ND	1	8	11	8	14	10	3
P. S ND	6	23	25	24	20	13	21
V. do ND	8	6	2	0	1	8	4
V. S ND	28	16	20	0	14	18	9

p. do : 40.7%

v. do : 21.6%

表Ⅲ-3

Group III	HAM	TN	TRO	AWW	OTH	LR	MAC
P. do ND	4	7	0	5	2	1	0
P. S ND	19	18	19	22	11	9	0
V. do ND	16	3	10	3	16	13	4
N. S ND	20	5	33	14	38	18	16

p. do : 16.2%

v. do : 31.1%

表Ⅲ-4

Group IV	TIM	PER	WT	TMP	TNK
P. do ND	1	0	2	2	0
P. S ND	11	9	8	1	3
V. do ND	2	8	4	7	11
V. S ND	18	22	28	15	29

p. do : 13.5%

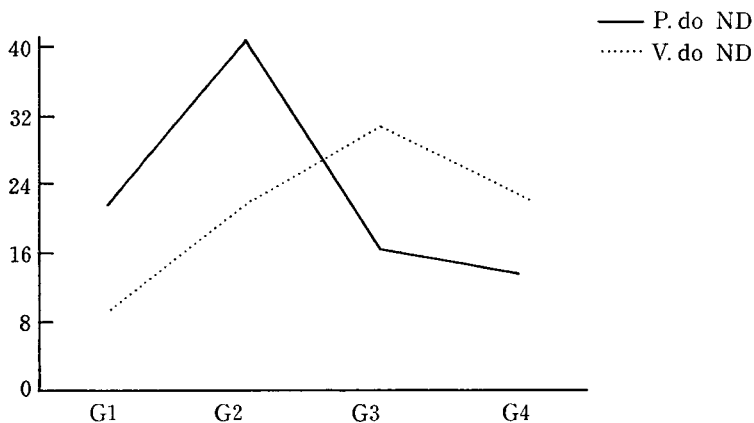
v. do : 22.2%

以上、表Ⅲ-1～4で見られたように、散文ではグループⅠからⅡへと急に成長しているにもかかわらず、グループⅢ～Ⅳでは大幅に減少している。韻文ではグループⅠ～Ⅲと順調に伸びているが、散文と同様、グループⅣでは減少している。これらの結果をまとめると次の表Ⅲ-5のようになる。またその増加および減少の様子は下のグラフで一層明らかであろう。

表Ⅲ-5

(↑は増加, ↓は減退を示す。)

G I	P. do ND : 21.7%		V. do ND : 9.8%	
G II	P. do ND : 40.7%	↑	V. do ND : 21.6%	↑
G III	P. do ND : 16.2%	↓	V. do ND : 31.1%	↑
G IV	P. do ND : 13.5%	↓	V. do ND : 22.2%	↓



IV. NI における do

NI については、ND の場合よりもっと極端で、1500年代ずっと10%以下に押さえられていたものが1600年代直前から急に成長を始め、やはり1700年代に ND と重なるように do の普及率が8割を越えている⁽⁸⁾。

グループ I～IVの散文では、do の使用はほとんどの作品でも5例以下と極めて低いが、韻文においては、グループ I に比べG II～IIIにおいて次第に増加しているように思われる。以下、各グループにおける結果を表で見ると次のとおりである。

表IV-1

Group I	1H6	2H6	3H6	ERR	SHR
P. do NI	0	1	0	0	0
P. S NI	0	6	0	2	8
V. do NI	2	2	3	2	9
V. S NI	24	21	20	7	19

p. do : 5.9%

v. do : 9.0%

表IV-2

Group II	ROM	1H4	2H4	WIV	ADO	H5	AYL
P. do NI	0	1	4	2	1	2	0
P. S NI	4	4	7	10	10	0	3
V. do NI	7	0	0	2	5	3	4
V. S NI	22	9	10	4	6	11	7

p. do : 20.8%

v. do : 23.3%

表IV-3

Group III	HAM	TN	TRO	AWW	OTH	LR	MAC
P. do NI	2	1	1	3	4	0	0
P. S NI	6	10	3	8	2	8	1
V. do NI	14	5	8	4	9	4	3
V. S NI	16	6	23	9	14	17	21

p. do : 22.4%

v. do : 30.7%

表IV-4

Group IV	TIM	PER	WT	TMP	TNK
P. do NI	1	0	0	3	0
P. S NI	7	0	4	4	0
V. do NI	2	5	10	6	0
V. S NI	23	11	12	13	12

p. do : 25.0%

v. do : 24.5%

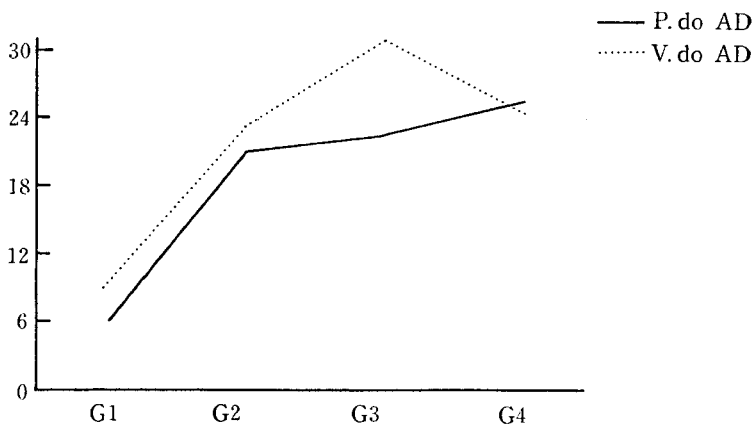
以上のように、散文の否定命令文では、わずかずつではあるが、グループ I～IVにおいて、do は着実に増加している。韻文でもグループIVにおいてやや減少が見られるが、全体ではほぼ増加しているといえよう。

これらの結果をまとめると次の表IV-5のようになる。また下のグラフから増加の様子は一層明らかであろう。

表IV-5

(↑印は増加, ↓は減少を示す。)

G I	P. do NI : 5.9%		V. do NI : 9.0%	
G II	P. do NI : 20.8%	↑	V. do NI : 23.3%	↑
G III	P. do NI : 22.4%	↑	V. do NI : 30.7%	↑
G IV	P. do NI : 25.0%	↑	V. do NI : 24.5%	↓



V. AD における do

AD における do は、他の文における do と異なり、do 形と do を用いない形 (S形) に分類せず、各作品における用例数の平均を示した。次の表 V-1 ~ 4 は、各作品の散文と韻文における do の分布状況を示す。

表V-1

Group I	1H6	2H6	3H6	ERR	SHR
P. do AD	0	6	0	0	0
V. do AD	66	75	62	66	43

p. do : 5 作品中平均 1.2 回

v. do : 5 作品中平均 64.2 回

表V-2

Group II	ROM	1H4	2H4	W I V	ADO	H5	AYL
P. do AD	2	15	19	15	22	18	14
V. do AD	82	67	68	2	20	72	36

p. do : 5 作品中平均 15.0 回

v. do : 5 作品中平均 49.6 回

表V-3

Group III	HAM	TN	TRO	AWW	OTH	LR	MAC
P. do AD	10	20	5	14	8	0	0
V. do AD	72	34	60	36	118	78	65

p. do : 5 作品中平均 8.1 回

v. do : 5 作品中平均 66.1 回

表V-4

Group IV	T I M	P E R	W T	T M P	T N K
P. do AD	5	5	3	6	3
V. do AD	45	75	67	77	34

p. do : 5 作品中平均 4.4 回

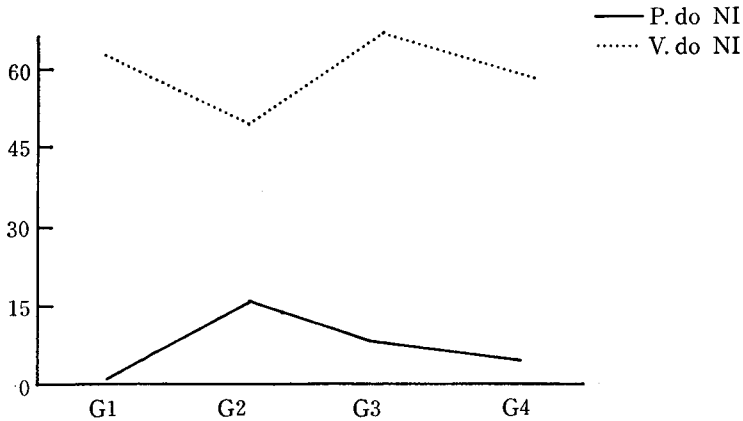
v. do : 5 作品中平均 59.6 回

以上、各グループにおける分布状況の結果をまとめるならば、次の表V-5 のようである。これによると、散文については、グループ I 即ち初期の作品群では do が極めて少なく(2H6 のみ発生)、グループ II 以降では、悲劇より、喜劇・歴史劇に多く見られるが、それもグループ III の後半から IV にかけて次第に減少している。また韻文でも、グループ I ~ IV 全期にわたって高い頻度であるが、概してグループ I ~ IV までさほど大きな増減がない。すなわち、do の使用にさほど変化がなかったことを示しているといえよう。これらは下のグラフによっても明らかである。

表V-5

(↑印は増加, ↓は減少を示す。)

G I	P. do AD : 1.2		V. do AD : 62.4	
G II	P. do AD : 15.0	↑	V. do AD : 49.6	↓
G III	P. do AD : 8.1	↓	V. do AD : 66.1	↑
G IV	P. do AD : 4.4	↓	V. do AD : 59.6	↓



まとめ

ここまでの各文における do の分布状況のグループ別の変化について、再度簡単に振り返ってみるならば、次のようである。

1. 否定疑問文 (NQ) の散文では、I～IIIの三期にかけて do は57%から80%へと、順調に発達している。ところが次の第四期においては33%と激減している。(表I-5 参照) Ellegård のグラフでも NQ における do は1500年代半ばから1600年近くにかけて一時的に減退している⁽⁹⁾。しかしそれ以降再び勢力を強めており、Shakespeare の第四期はこの一時的減退の時期よりも後の時期である。したがって、もし Ellegård のデータが正しければ、Shakespeare のこの時期の、33%という数値は極端に低いものであり、これは Ellegård も指摘しているように、テキストによる偶然の結果と判断した方が正しいように思われる。すなわち実際には第三期と同様か、少なくとも

その前後の範囲で do は普及していたと思われる。しかし、その一方で他の否定文 (ND と NI) においても NQ と同様、Ellegård のグラフでは半世紀間の減少が見られ、これら否定文における do の減少が、テキストによる単なる偶然の結果なのか、それとも時代の意図的な現象なのか、疑問の残るところである。

2. 肯定疑問文 (AfQ) の散文ではグループ I から III にかけて、41% から 51% と順調に増加し、グループ IV で約 48% と減少傾向が見られた。(表 II-5 参照) しかし、この減少はごくわずかなものであり、全体では増加の傾向にあるといえる。韻文では 30%~45% という順調な伸びが見られた。

これらの AfQ の中で、VQ は AfQ 全体の結果と同様、グループ I から III にかけて 45~69% と増加し、グループ IV で 63% と若干減少するという様子を示したが、これも全体的には増加した、といえよう。(表 II-1-5 参照)

また AQ では、グループ II から IV において 19~41% という順調な伸びを見せているが、その前のグループ I で 67% という数値であったことを考慮するならば、年代別というよりは、むしろ作品別による do 使用の傾向があるように思われる。すなわち、創作年代全期においてあまり使い方が変化していない、ともいえる。(表 II-2-5 参照)

OQ については、AQ よりもさらに頻度が低く、VQ と同様に、グループ I から III まで 20~30% と、およそ順調に増加しながら、IV では再び 25% と減少している。したがって、AQ 同様、全体ではあまり変化がなかったと判断したほうがよいように思われる。(表 II-3-5 参照)

このように、これまで度々言及してきたように、同じ疑問文でも VQ と AQ、OQ とでは do の使い方に差があり、これは Yes-No Question と Wh の疑問詞をもつ疑問文の差である。

3. 否定平叙文 (ND) については、グループ II で 40% と、Ellegård の数値よりもはるかに高い普及率を示しながら、グループ I、III~IV では 22% から 14% と低迷しており、Ellegård のグラフ同様、16世紀半ばから17世紀にかけて do が伸び悩んだ様子が Shakespeare の短い創作年数の中に読み取

れるように思われる。(表Ⅲ—5 参照)

4. 否定命令文 (NI) では表Ⅳ—5に見られたように、散文でグループ I からⅣまで6%から25%と急速かつ着実な伸びを示し、また韻文で9%から30%とほぼ同様の結果であった。またこれらの数値は、Ellegård のグラフに見られる否定命令文における do の頻度の高まりを、そのまま反映した格好となっている。

5. 肯定平叙文 (AD) においてはどうかであったかという、散文でグループⅡからⅣにかけて、15%から4%と減少傾向にあり、これは、Ellegård のグラフが示す AD における do の推移を如実に表しているといえる。すなわち、1500年代半ばにかけて一時的にその頻度が増加するが、しだいに衰退の一途を辿るのである。また韻文でも全期をつうじて50%~60%の普及率でさほど大きな変化は見られない。

以上まとめたように、一部の文において必ずしも増加の傾向を示しているといえないものもあるが、全体として見た場合、Shakespeare の初期の作品から末期の作品にかけてほとんどの文において、do はその分布を着実に増やしていった、すなわち Shakespeare が1589年から1613年までの24年間の創作期間中の中で、少なからず do 使用の影響を受けていった、と解釈しても過言ではないように思われる。今後さらに多くのデータを収集し、より詳細な研究成果を追求していきたい。

註

- (1) Ellegård, A. p. 162 グラフ参照
- (2) 同上 p. 162
- (3) *The Riverside Shakespeare*, pp. 47-56
- (4) 同上
- (5) *The Harvard Concordance to Shakespeare* (1973)
- (6) 拙論、「初期近代英語における迂言的 do の発達に関する一考察」学習院女子短期大学紀要第28号 (1990)
- (7) Ellegård, A. p. 162

- (8) 同上 p.162
 (9) 同上 p.162
 (10) 同上 pp.162-163
 (11) 拙論,「初期近代英語における迂言的 do の発達に関する一考察」学習院女子短期大学紀要第28号(1990) pp.92-93
 「シェイクスピア劇における迂言的 do の発達に関する一考察」九州女子学院短期大学学術紀要第15号(1990)
 (12) Ellegård, A. p.162

参考文献

- Abbott, E.A. 1884. *A Shakespearian Grammar* (reprint) 1954. Senjo.
 Araki, K. 1980. 「シェイクスピアの発音と文法」(中尾祐治共著) 荒竹出版
 ……………1984. 「英語史ⅢA」東京:大修館
 Ellegård, A. 1953. *The Auxiliary Do*. Stockholm: Almqvist & Wilsell
 Franz, W. 1934 *Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa*. Halle: Niemeyer.
 Jespersen, O. 1909-49. *Modern English Grammar*. 7 vols. London & Copenhagen: Allen & Unwin, and Munksgaard.
 ……………1966. *Negation in English and other Languages*. Copenhagen Munksgaard.
 Mätzner, E. 1874. *An English Grammar* tr. by V.J. Grece repr. 1962
 Mitchell, B. 1964. *A Guid to Old English*. Oxford: Blackwell.
 Mustanoja, T.F. 1960. *A Middle English Syntax I*. Helsinki:
 Nakao, T. 1972 「英語史Ⅱ」東京:大修館
 Onions, C.T. 1975. *A Shakespeare Glossary* Oxford Univ. Press.
 Sweet, H. 1891. *New English Grammar*. Oxford
The Oxford English Dictionary (OED)
 Visser, F. Th. 1963-73 *An Historical Syntax of the English Language* 4 vols. Leiden: Brill.
 G. Evans, Blakemore 1974. *The Riversie Shakespeare* 2 vols. Boston: Houghton Mifflin
 Harbage, A. 1969. *William Shakespeare The Complete Works*. New York: The Viking Press
 Furusho, M. 1987. *A Historical Study of Periphrastic do in the Shakespeare's Comedies*. (九州女子学院短期大学学術紀要第12号)

-1988. *A Historical Study of Periphrastic do in the Shakespeare's Tragedies.* (九州女学院短期大学学術紀要第13号)
-1989. *A Historical Study of Periphrastic do in the Shakespeare's Histories and Romances.* (九州女学院短期大学学術紀要第14号)
-1990. *On the Growth of Periphrastic do in the Shakespeare's Dramas.* (九州女学院短期大学学術紀要第15号)
-1990. *A Historical Study of Periphrastic do in the Early Modern English, with Special Reference to Shakespeare* (学習院女子短期大学紀要第28号)

(ふるしょう まこと 本学助教授・人文科英語研究室)